光源氏の驕り

上野辰義

一　問題の所在
二　「おごり」の教訓
三　「おごり」の教訓の顛末―明石姫と紫上
四　「おごり」の教訓の顛末―夕霧と光源氏
五　驕りの対象となる女性

老いの域に至る明年の四十歳を前に、三十九歳の光源氏は、最愛の妻紫上や実子夕霧、明石姫に実質的の驕りを誡める。それは自己のそれまでの人生経験に由来し、自己の出家を光源氏家の将来の安泰繁栄を思うものであった。だが、その訓戒は女性たちにはかろうじて守られたものの、男性においては、光源氏本人を含め、女性問題・すきに関わって、護持することが叶わず、如何ともしがたい男のさがを知らしめ、結果、光源氏の人間的成長に関与するものとなった。

一　問題の所在

光源氏は、物語文学をはじめとした語りの伝統の中にいる。例えば、

前の世にも、御契りや深かりけむ、世になくきよらなる玉のをのこ御子さへ生まれ給ひぬ。　（桐壺六）

という誕生の様からしてそうだし、彼がその光り輝く容貌をはじめとする、超人的な、優れた資質を備えて物語世界を生き、折口信夫の「貴種流離譚」の型を踏まえて、三谷栄一氏の言われるように、須磨に謫居し、閑居の淋しさ、大暴風雨、落雷、という艱苦の結果、桐壺父帝の霊夢の教示、明石入道一族との結合を得て、都に召還され、「源氏一門に繁栄がもたらされる」[1]という、彼の人生の基本型も、またそうである。だが、同時に、同じく三谷氏が「この貴種流離譚のパターンの核を占める試練」について言われるように、当時の貴族社会における「宿世観や因果思想の影響のもとに、光源氏自身の罪によってそれ（＝貴種流離譚のパターンの核を占める試練）がもたらされるという点で極めて高揚した個人的体験が描かれており、それは貴種流離譚を内的な世界へと結びつける根拠になっている」。そうした物語の型と、その型に秘められた当時の貴族社会の現実を背景とした個人のリアルな心理との融合・併存が、源氏物語が物語史の伝統の中から生まれながら、若菜巻以降の第二部の世界のように、その伝統を越えて、登場人物の「内的な世界」や当時の貴族社会の動静など、物語内外の現実に基づき、新たな物語創造を紡いでいく一つの始原ともなっている。

こうした伝統の型に沿った光源氏の人生の極点を示す出来事が、光源氏三十九歳の藤裏葉巻における准太上天皇の称号獲得と冷泉帝朱雀院の六条院への同時行幸御幸だが、この翌年には四十歳となり、長寿の祝いである算賀の奉献も予想される三十九歳の光源氏は、一方で、それまでの物語史に見えない、一族に「おごり」を誡めるという行動をとる。これはある意味、源氏物語作者の創意でもあるのだが、光源氏は、まず、息子の夕霧に、雲居雁との結婚問題に関わって、次のような教訓をする。女の父内大臣が態度を軟化し始めながらも、結婚をいまだ許さぬ時、

位浅くなにとなき身のほど、うちとけ、心のまゝなるふるまひなど物せらるな。心おのづからおごりぬれば、思ひしづむべきくさはひなき時、女のことにてなむ、かしこき人、昔も乱るゝ例ありける。　（梅枝九九〇）

また、雲居雁との結婚後、

大臣の御掟てのあまりすくみて、なごりなくくづほれ給ひぬるを、世人も言ひ出る事あらむや。さりとても、我が方

たけう思ひ顔に、心おごりして、すき〳〵しき心ばへなど漏らし給ふな。さこそおいらかに大きなる心掟てと見ゆれど、下の心ばへをゝしからず癖ありて、人見えにくきところつき給へる人なり。（藤裏葉一〇〇五）

結婚前も結婚後も、「心おごり」して女性問題を起こすなというのである。「心おごり」が、「心おのづからおご」ることであるのは、この梅枝例で明らかだろう。

また、最愛の妻紫上にも、彼女が、みあれに詣でた翌日、賀茂祭の「かへさ」の桟敷で、見物の威儀を正して、光源氏の第一婦人としての存在を顕わにしている様から、昔の車争いの事件を想起して、次のように語る。

「時に寄る心おごりして、さやうなることなん、なさけなき事なりける。こよなく思ひ消ちたりし人も、嘆き負ふやうにて亡くなりにき」と、そのほどはの給ひ消ちて、「残りとまれる人の、中将はかくたゞ人にて、わづかになりのぼるめり。宮はならびなき筋にておはするも、思へばいとこそあはれなれ。すべていとさだめなき世なればこそ、なに事も思ふままにて、生ける限りの世を過ぐさまほしけれど、残り給はむ末の世などの、たとしへなき衰へなどをさへ、思ひはゞからるれば」とうち語らひ給ひて、（藤裏葉一〇〇八）

無常の世ゆえ、光源氏没後の、紫上の衰退が心配だから、生前の行動を慎まねば、と、「心おごり」の抑制をうながすメッセージを間接的に、彼女に伝えた。[2]

さらに、娘明石の姫にも、その場で「心おごり」の語は使っていないが、梅枝巻で、明石姫入内の調度の絵の中に、

かの須磨の日記は、末にも伝へ知らせむとおぼせど、今少し世をもおぼし知りなんにとおぼしかへして、まだ取りいで給はず。（梅枝九八九）

としたのも、姫君の心おごりを抑制するために、須磨の絵日記を活用する最善の時期を探った判断とみられる。実際、明石姫は、この須磨の日記ではないが、後に祖母明石尼君から自己の出生事情を聞き、自らの「心おごり」を自省する。そのようなことができる境遇ではなかったのだと。

心のうちには、我が身は、げにうけばりていみじかるべききはにはあらざりけるを、対の上の御もてなしにみがゝれて、人の思へるさまなどもかたほにはあらぬなりけり。人をばまたなき者に思ひ消ち、こよなき心おごりをばしつれ、世の人は、下に言ひいづるやうもありつらむかし、などおぼし知りはてぬ。（若菜上一〇八八）

このように、光源氏の、最愛の妻、実子に対する「心おごり」の誡めは、その効果の望めない十一歳の明石姫を除けば、光源

氏三十九歳の物語に集中している。それ以外では、夕霧の大学入学に際し、その意図を大宮に、

高き家の子として、つかさかうぶり心にかなひ、世の中盛りにおごりならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむおぼゆべかめる。…。なほ、才をもとゝしてこそ、大和魂の世に用ゐらるゝかたも強う侍らめ。さしあたりては心もとなきやうに侍れども、つひの世のおもしとなるべき心おきてをならひなば、侍らずなりなむ後もうしろやすかるべきによりなむ。（少女六六八）

と、説明したり、朱雀院女二宮との醜聞に、目の前にいる夕霧に、

さるさまのすきごとをし給ふとも、人のもどくべきさまもし給はず、鬼神も罪許しつべく、あざやかにものきよげに若う盛りに匂ひを散らし給へり、もの思ひ知らぬ若人の程に、はたおはせず、かたほなる所なうねびとゝのほり給へる、ことわりぞかし、女にて、などかめでざらむ、鏡を見ても、などかおごらざらむ、とわが御子ながらもおぼす。（夕霧一三六三）

と、「おごる」ことを回避すべきという認識をもっていることは確認できるが、いずれの場合も、本人夕霧には、教訓していない。なお、この両例が「心おごり」の名詞ではなく、「おごりならふ」「おごる」という動詞の使われていることが、注意される。

以上の諸例、特に光源氏三十九歳の梅枝・藤裏葉巻に見られる例からは、来たる年に老いを自覚される域、人生の区切りに至るのを前にして、末長い子孫の繁栄を庶幾して、その阻害要因となる「慢心」（後述参照）を生じさせる「心おごり」を否定し、一族に誡める光源氏の姿勢と思想がうかがわれる。

これには、一族の繁栄と安定を確認して、年来の出家の本意を実現しようという光源氏の意向とも密接に関わっているのだが、

大臣も、長からずのみおぼさるゝ御世のこなたにとおぼしつる（明石姫の東宮への）御参り、かひあるさまに見たてまつりなし給ひて、心からなれど、世に浮きたるやうにて見苦しかりつる宰相の君も、思ひなくめやすきさまに静まり給ひぬれば、御心落ちゐはて給ひて、今は本意も遂げなん、とおぼしなる。対の上の御ありさまの見捨てがたきにも、（秋好）中宮おはしませば、愚かならぬ御心寄せ也。この（明石姫の）御方にも、世に知られたる親ざまには、まづ思ひきこえ給ふべければ、さりともとおぼしゆづりけり。夏の御方の、時にはなやぎ給ふまじきも、宰相の物し給へば、とみなとり〳〵にうしろめたからずおぼしなり行く。（藤裏葉一〇一二）

これらの「(心) おごり」「おごる」の教訓は、物語の伝統からすれば、源氏物語、光源氏の初めて行う創造なのである。

二　「おごり」の教訓

作り物語における、このような「おごり」による教訓は、源氏物語以前に見いだせない。それどころか、そもそも「おごり」「おごる」等の諸語が、そんなに使われてはいないのである。

今、古典対照語彙表その他の索引類を検して、平安時代までの主な作品の様子をみると、おごる・おごり類は、万葉集、日本霊異記、懐風藻、竹取物語、伊勢物語、古今集、土佐日記、後撰集、大和物語、蜻蛉日記、紫式部日記、和泉式部日記、栄花物語、浜松中納言物語、堤中納言物語等になく、古事記（心奢る1例）・日本書紀（驕3例、驕慢1例、奢侈1例、傲很1例、）・風土記（驕1例、奢1例）以下、うつほ物語（心おごり1例）、落窪物語（心おごり1例、おごりありく1例）、枕草子（おごる1例、心おごり1例）、源氏物語（おごる7例、思ひおごる1例、おぼしおごる2例、おごりならふ2例、心おごりす7例、心おごり7例）、更科日記（心おごり2例）、夜の寝覚（おごり2例、心おごり2例、おごる3例、思ひおごる2例、おごらはし1例）、狭衣物語（おごり1例、心おごり2例）、大鏡（心おごり3例）、今昔物語集（いさみおごる〈勇寵〉3例、いさみおごりかなり〈勇寵〉1例）、『新編国歌大観』（〈平安期の歌集のみ検索〉「おごる」6例、「こころおごり」5例）という具合で、例が拾えないか、少数例の作品が多い中で、源氏物語の計三六例、「おごらはし」の形容詞もある、夜の寝覚の計一〇例が目立つ。

意味も、上代の例からほとんどすべてが、日本国語大辞典第二版「おごる」の語義「(1) 人に優越した自分の立場を当然と思う。いい気になる。得意になる。増長する。わがままにふるまう。」の意で解し得て、

難波の高津の宮の天皇のみ世、伯耆の加具漏・因幡の邑由胡の二人、大く驕りて節なく（大驕无節）、清酒を以ちて手足を洗ふ。ここに、朝庭、度に過ぎたりと爲て、狭井連佐夜を遣りて、此の二人を召さしめき。

（播磨国風土記　彌加都岐原）

同じく「(2) 必要以上にぜいたくな状態になる。」の例も、わずかだが、源氏物語に見られ、

「帝王の深き宮に養はれ給ひて、色いろの楽しみにおごり給ひしかど、深き御うつくしみ、大八洲にあまねく、沈めるともがらをこそ多く浮かべ給ひしか　（明石四四三）

同じくまた、「こころおごり」の「思いあがること。得意になること。自負。慢心。」の例も、

その野よりかへりたるに、あるざうしのごたちものいひかくるにももしきにうつしてううるをみなへしこころおごりのいかがせざらむ　（元真集）

とあり、「こころおごりす」の例は、さらに早く、

爾に其の嬢子、常に種種の珍味を設けて、恒に其の夫に食はしめき。故、其の（夫デアル）國主の子、心奢りて妻を詈るに（心奢詈妻）、（色葉字類抄〈前田本・黒川本〉「奢」訓「ヲコル」）　（古事記、応神天皇）

と見いだせる。

こうした語義用法を持つ「おごる」「おごり」について、大野晋編『古典基礎語辞典』「おごる」項（依田瑞穂氏執筆）は、

語幹オゴは動詞アガル（上がる、ラ四）のアガの母音交替形。アガルは下から上に一足飛びに高くなる意で、低い位置にあったときとは質が変わる意を表すことがある。オゴルは、自分はかけ離れた高い所にいる者で、下の者とは質が違うと思って、人を見下す意。また、身分不相応の、あるいは度を越したぜいたくをする意。のちには、人にごちそうをする意でも使われる。

類義語ホコル（誇る）は、自分がすぐれていることに自信をもち、得意である意。

『名義抄』には、「驕・奢・誇」などの漢字に、オゴル・ホコル両訓が揚げられていることから、二語の意味的な関連を認めることができる。

と、しているが、妥当な理解であろう。『岩波古語辞典』「おごり」項では、同様の母音交替形として、さらに、オソ（遅）・アサ（浅）、コト（異）・カタ（片）、ホドロ（斑）・ハダラ（斑）を挙げる。実際の用例では、次のようなものが、これに言うオゴルの語義説明に呼応するものであろう。

我が方たけう思ひ顔に、心おごりして、すきぐしき心ばへなど漏らし給ふな。　（藤裏葉一〇〇五）

われたけく思ひおごり、　（夜の寝覚巻五）

先に、「おごる」「おごり」による教訓は、作り物語において源氏物語以前に見いだせない、と言ったが、では、それらによる教訓がどこで言われていたかというと、その歴史は古い。まずは、唐土からである。

敖不可長、欲不可從、志不可滿、樂不可極。

（礼記・曲礼、引用は漢文大系による）

「敖」は色葉字類抄（前田本・黒川本）に「ヲコル」、観智院本

類聚名義抄法中に「オコル」と訓がある。

鄭玄注に、「(敖・欲・志・楽)四者慢遊之道。桀紂所以自禍」とあり、敖りによる増長を戒めた。[3] 礼記は五経の一つで、一条朝では、敦成親王の御湯殿の儀に、中庸篇・文王世子篇が、敦良親王の御湯殿の儀に、文王世子篇が読まれている(御産部類記、東京大学史料編纂所データベース検索による)。源氏物語執筆との前後関係は正確には不明だが、紫式部日記筆録期間内のことである。礼記自体は月令篇を中心に、源氏物語にも踏まえられている。

ついで、史記世家篇 魯周公世家第三では、周公旦が、魯に赴く我が子の伯禽をこう誡めた。「我文王之子、武王之弟、成王之叔父、我於天下亦不賤矣。然我一沐三捉髪、一飯三吐哺、起以待士,猶恐失天下之賢人。子之魯、慎無以國驕人」(漢籍電子文献資料庫による)、最後の文で「いまおまえは魯に行くが、国権をかさにきて、人に驕慢にならぬよう慎むがいい。」(世界文学大系史記による)と。

「驕」は、色葉字類抄に「ヲコル」訓がある。同じく、そのうち、周公旦は、成王の政治が「淫佚」に流れるのを恐れて、「多士」とともに「毋逸」を作り、その「毋逸」にはこう述べる。

「為人父母、為業至長久、子孫驕奢忘之、以亡其家、為人子可不慎乎」、すなわち「人の父母となって家業を治めるときは、いたって長久の計を立てるが、子孫は驕奢で、その業を忘れ、その家を滅ぼしてしまう。人の子として、慎まないでよいものだろうか。」と。史記のこの箇所は、源氏物語賢木巻にも、光源氏の言動に、

わが御心地にもいたうおぼしおごりて、「文王の子武王の弟」とうち誦じ給へる、御名のりさへぞげにめでたき。成王のなにとかの給はむとすらむ。そればかりやまた心もとなからむ。(賢木三七四)

と、「おぼしおごりて」の語句とともに引用されている。作者紫式部承知の句である。

また、白氏文集巻一風諭詩「凶宅詩」に、こうある。

我今題此詩　欲悟迷者胸　凡為大官人　年禄多高崇　権重持難久　位高勢易窮
驕者物之盈　老者数之終　四者如寇盗　日夜来相攻　假使居吉土　孰能保其躬

「私はいま、この詩を書いて、迷信にとりつかれた人々の心を悟らせたいと思う。……。驕りは物事の満ちた状態であり、老いは命数の終わりなのだから、満つれば欠け、老いては死するのが世の定めというものである。……」(新釈漢文大系による)、だから凶宅となるのも、住む人間に原因があるのである、と。この凶宅詩も、源氏物語夕顔・末摘花両巻に、荒廃した家の様

として踏まえられている。

さらに、源氏物語桐壺巻に、寛平御遺誡が踏まえられていることから、明文抄巻一帝道部上に引く寛平御遺誡逸文「天子雖不窮経史百科、而有何所恨乎。唯群書治要早可誦習。」（日本思想大系による）に、帝王学として群書治要を学ぶべきこと、この条を引く禁秘抄巻上諸芸能事条に、これと合わせて貞観政要を大事としていること、その貞観政要巻一政体に、「貞観十九年、太宗謂侍臣曰、朕観古来帝王、驕矜而取敗者、不可勝数、……、（晋の武帝、隋の文帝は、呉・陳をそれぞれ滅ぼしたのち、）心逾驕奢、自矜二諸ヲ己一、臣下不復敢言、政道因茲彌紊。……。朕恐懐驕矜、恒自抑折、」（新釈漢文大系による）と、驕奢・驕矜を誡めていること、日本の臣下の誡めとしては、師輔の九条右丞相遺誡「凡為人常致恭敬之儀、勿生慢逸之心、交衆之間、用其心也。」（日本思想大系による）と、人に恭敬し、慢逸心を抱かぬようにとの誡め、等々の存在が、想起され、それぞれの紫式部、源氏物語への影響も推測されるが、先に示した諸作品ほどの、断定は難しい。[4]

三　「おごり」の教訓の顛末―明石姫と紫上

こうして、源氏物語作者は、「おごり」の教訓の先例を、おそらく先行する作り物語においては見いだせなかったが、作者の親しんだ漢籍から学び、さらに想像される、日本の貴族社会の帝・臣、等の家訓、日常生活の見聞等から、自分のものとして、作品の中に組み込んでいったのであろう。それには当然、その誡めの採用にふさわしい、物語内の状況が作り出されたということだが、それは、先に述べた如く、光源氏からなされた、一族の最愛の妻である紫上、息子の夕霧、あまりに若年ゆえに意図のみで実行はされなかったが明石姫らに対する、「おごり」の教訓、誡めは、光源氏三十九歳の梅枝・藤裏葉巻に集中して見られるものであった。これには、来たる年に四十歳となり老いを自覚される域、人生の区切りに至るのを前にして、末長い子孫の繁栄を庶幾して、その阻害要因となる「心おごり」を否定し、一族に誡め、そしてまた、そのようにして一族の将来の繁栄と安定を確固としたうえで、自身の年来の宿願である出家の本意を実現しようという光源氏の姿勢と思想に由来すると見られた。

では、この「おごり」の教訓を行った光源氏の意図は、対象者において十分に効果があったのかというと、夕霧、紫上、明石姫それぞれにおいて、異なる。

まず、明石姫においては、前述したように、東宮入内に際し

て、須磨の日記を介して「おごり」の教訓を意図したとみられるが、姫の年齢を考慮し先延ばしされ、二年後、姫の東宮第一皇子出産を機に、須磨の日記ではなく、代替的に祖母明石尼君の話により自己の出生事情を知り、養母紫上の威光によって引き立てられていたものの、自分の出自からすれば、これまでのような、「人をばまたなきものに思ひ消ち、こよなき心おごりを」できる分際ではなかったのだと、反省がなされる。そして、その後も、紫上を「まことの御親にもてなしきこえ給ひて」（若菜下）、東宮（今上帝）の皇子・皇女を生み続け、中宮になるという、期待される人生を送り、光源氏による「おごり」の教訓の存否はともかく、明石入道の手紙ともども、中宮教育の成果は十分発揮されたと言える。

紫上についても、前述のように藤裏葉巻で、みあれに詣でた翌日、賀茂祭の「かへさ」の桟敷で、見物の威儀を正して、光源氏の第一婦人としての存在を顕わにしている様から、光源氏は、昔の車争いの事件を想起して、当時の正妻葵上のように、「時に寄る心おごりして、さやうなることなん、なさけなき事なりける」と、当事者の遺児、夕霧と秋好中宮の現状を示しながら、無常の世ゆえ、光源氏没後の、紫上の衰退が心配だから、生前の行動を慎まねば、と、「心おごり」の抑制をうながすメッセージを間接的に、彼女に伝えていたが、紫上は、死後に、語り手から、

世の中に幸ひありめでたき人も、あいなうおほかたの世にそねまれ、よきにつけても心の限りおごりて、人のため苦しき人もあるを、あやしきまですゝろなる人にもうけられ、はかなくしいで給ふことも、なにごとにつけても世にほめられ、心にくゝ、をりふしにつけつゝらう〳〵じく、ありがたかりし人の御心ばへなりかし。（御法一三九六）

と、称賛され、「おごり」が否定されていた。光源氏も、女楽の終了後、

君こそは、さすがに隈なきにはあらぬものから、人により事に従ひ、いとよく二筋に心づかひはし給ひけれ。さらに、こゝら見れど、御ありさまに似たる人はなかりけり。いとけしきこそものし給へ」（若菜下一一六七）

と、妻として女性として「まことの心ばせおいらかに落ちゐたる」（若菜下）要求に敵う人物として誉めていたし、これ以前にも、東宮第一皇子出産後の明石女御に向かって、紫上を、

たゞまことに心の癖なくよきことは、この対をのみなむ、これをぞおいらかなる人と言ふべかりける、となむ思ひはべる。（若菜上一一〇六）

と、誉めていた。

ただ、これらでは、光源氏が、紫上を、「さすがに隈なきにはあらぬものから」状況に応じて心を使い分けて対応し、心の働き、機転が「おいらか」で落ち着いている、と言っていることが注意される。というのは、紫上本人が、藤裏葉巻の同年末、若菜上巻初で、光源氏から女三宮の六条院降嫁を告げられた時、既に、今回の事は突然で、事情があり、避けがたいのだから、じたばたせず受け入れよう、ぶざまな対応を世間や継母式部卿宮の大北の方に見せて笑われないようにしよう、と考え、それを語り手から、「おいらかなる人の御心といへど、いかでかはかばかりの隈はなからむ」と批評されていたからである。「隈」のある「おいらか」な紫上像で、連続している。そして、この「隈」のある「おいらか」な紫上は、これに続いて、心中で、

今はさりとも、とのみ我が身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、人笑へならん事を下には思ひ続け給へど、いとおいらかにのみもてなし給へり。（若菜上一〇五二）

と、内心の動揺を隠しつつ、表面は意図的に「いとおいらかに」振るまっていた。

ここの「今はさりとも、とのみわが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける」について、石阪晶子氏は、「長年連れ添った中で、男君からの庇護や情愛を、次第に当然のものとして受け取るようになり、自然と相手への危機感が薄れ、いつのまにか慢心に至っていたという油断である。若さの驕りを自覚する態度、といってもよい」と言われ、『思ひあがり、うらなく過ぐ』すとは、男君の庇護におもねることであり、そこには驕りがひそんでいた[5]」とされる。「おもねる」は追従の態度であり、驕りと齟齬するから、「男君の庇護を当然のこととみなす」などとする方がまだよいであろうが、確かにここの「思ひあがり」は、自負というより、慢心に近い意味であり、「おごり」を想起させるものではあろう。石阪氏はさらに、それ以前の紫上の行動にも、「明石の君の手紙を『後目（しりめ）』（流し目）に見たり、また、玉鬘の巻の衣配りの場面で、やはり明石の衣装を「めざまし」（生意気だ）と感じる紫の上には、嫉妬や驕慢さが渦巻いている」と、指摘される。明石の御方との身分差を考えれば、嫉妬はともかく、驕慢さは意識しなくてもよいかもしれぬが、紫上にも、生身の人間として嫉妬や自己保身・自負など、自己の生存欲・生命力に由来する「隈」があり、光源氏から女三宮降嫁を知らされた時には、己の内なる慢心を自覚したということだろう。（女三宮との初対面時にも、「われよりかみの人やはあるべき、身のほどなるものはかなきさまを、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめ、など思ひ続けられて」〈若菜上〉いた。）

だが、注意しておくべきは、ここが、驕りに近い場面ながら、語り手、或いは紫上は、「おごる」という語を避けて、気位・自

負の高さを意味して褒められることも多い「思ひあがる」という語をここで使っているということである。「おごる」の使用は微妙に避けられた。同年初夏の光源氏からの誡めもあり、苦悩する理想的な女君としての紫上を、「おごり」から守ったのである。こうして、紫上は、御法巻の語り手による誄に見られるように、一夫多妻の六条院世界で、光源氏の誡めに適い、「おごり」を退け、「みづからの御心地には、この世にあかぬことなく、うしろめたきほだしだにまじらぬ御身なれば、あながちにかけとゞめまほしき御命とも思されぬ」（御法）人生を送ることができたのである。

四　「おごり」の教訓の顛末―夕霧と光源氏

明石姫や紫上の場合に較べ、夕霧の場合は趣きを異にする。光源氏の教訓が破られたからである。どんな教訓をしていたか。雲居雁との結婚前のものを詳しく見てみよう。

かやうのこと（＝結婚・女性問題）は、かしこき御教へにだに従ふべくもおぼえざりしかば、ことまぜまうけれど、今思ひあはするには、かの御教へこそ長き例にはありけれ。つれ〴〵とものすれば、思ふ所あるにや、と世人もおしはかるらんを、宿世の引くかたにて、なほ〳〵しきことに、あり〳〵てなびく、いとしりびに人わろきことぞや。いみじう思ひのぼれど、心にしもかなはず、限りあるものから、すき〴〵しき心つかはるな。いはけなくより宮のうちに生ひいでて、身を心にまかせず所せく、いさゝかの事のあやまりもあらば、かろ〴〵しきそしりをや負はむと包みしだに、なほすき〴〵しきとがを負ひて、世にはしたなめられき。位浅くなにとなき身のほど、うちとけ、心のまゝなるふるまひなど物せらるな。心おのづからおごりぬれば、思ひしづむべきくさはひなき時、女のことにてなむ、かしこき人、昔も乱るゝ例ありける。さるまじきことに心をつけて、人の名をも立て、みづからも恨みを負ふなむ、つひのほだしとなりける。とりあやまりつゝ見ん人の、わが心にかなはず、忍ばむことかたき節ありとも、なほ思ひかへさむ心をならひて、もしは親の心にゆづり、もしは親なくて世の中かたほにありとも、人柄心苦しうなどあらむ人をば、それをかたかどに寄せても見給へ。我がため、人のため、つひによかるべき心ぞ、深うあるべき」など、のどやかにつれ〴〵なるをりは、かかる御心づかひをのみ教へ給ふ。

（梅枝九九〇）

雲居雁との結婚問題が硬直して、他家からの縁談にも耳を貸

さず、独り身でいる夕霧に対する光源氏の教訓である。自分を律して、つまらぬ結婚をせず、身をもちくずすな、思いどおりの結婚は困難なものだが、かといってすき心をつかうな、若い時期に気を許して気ままな行動をするな、得意になって心奢りして、女のことで失敗するな、身を落ち着けて女の恨みを買わず、女への不満をこらえよ、と。要は、すき心を使わず、心驕りせず、身を落ち着けて女の欠点も大目に見よ、ということだが、雲居雁問題への対処というよりは、結婚・女性問題全般にわたっており、その関係で、光源氏の体験・考えが披歴されているのが注意される。光源氏が己を語っているのである。

まず、父桐壺院による教訓を引き合いに出して、当時の自分はそれに従う気もしなかったが、今に思えばそれは普遍的な有効な教訓であった、と回想・評価している。十九歳時（旧年立十八歳）に紅葉賀巻で受けた、夫婦仲がうまくいっていない葵上に関して大事に扱うよう忠言されたものもあるが、ここは、二十一歳時（旧年立二十歳）に、頼りない光源氏の愛に苦悩して、娘の斎宮とともに伊勢に下ってしまおうかと思い悩む六条御息所とのことを案じて、光源氏になされた教訓を意識している。

「故宮（＝前坊）のいとやむごとなくおぼし、時めかしたまひしものを、かる〳〵しうおしなべたるさまにもてなすなるがいとほしきこと。斎宮をもこの皇女たちの列になむ思へば、いづかたにつけても愚かならざらむこそよからめ。心のすさびにまかせて、かくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」など、御けしきあしければ、わが御心地にもげにと思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひ給ふ。「人のため恥ぢがましき事なく、いづれをもなだらかにもてなして、女の恨みな負ひそ」とのたまはするにも、けしからぬ心のおほけなさを聞こしめしつけたらむ時、と恐ろしければ、かしこまりてまかで給ひぬ。

（葵二一八三）

桐壺院が、光源氏の六条御息所との関係を、「心のすさびにまかせ」た「すきわざ」と断じていることも注意されるが、女に恥をかかさず、どの女性も穏便に対処して恨みを買うな、と訓戒していたことが、光源氏には意識され、正当な教訓だったと、今は得心しているのである。この部分は六条御息所との体験が主だが、梅枝巻の夕霧への教訓「つれ〴〵とものすれば、思ふ所あるにや、と世人もおしはかるらんを」以下の、各言辞の部分でも、岷江入楚などの注するところを俟たなくとも、藤壺、夕顔、末摘花、花散里などの女性たちとの体験が裏に意識されているかと、推量されてくる。また、「いはけなくより宮のうちに生ひいでて…世にはしたなめられき」の体験の吐露も、朧月

夜―藤壺ラインの回想である。十分注意していたのに、「なほすき〳〵しきとがを負ひて、世にはしたなめられ」た、という。これらは、息子の手前、体裁を取り繕っている言葉遣いがうかがわれるが、まさに結婚問題の真っただ中にいる十八歳の夕霧に、玉鬘までのこれまでの自己の女性経験から醸成され整理された、三十九歳の中年男太政大臣光源氏の智慧を開示しているのである。現在・将来の光源氏自身の行動がこの矩を越えるか否かは別にして。

冒頭で掲出した、雲居雁との結婚直後の夕霧に対する訓誡（藤裏葉一〇〇五）ともども、どちらでも、「心おごり」「心おのづからおご」って「すき〳〵しき心ばへ」「すき〳〵しき心」をつかうな、と誡めている。心の驕りが、女の件で道を誤らせ、公私にわたって失点となるとの認識である。

この父の教訓を、十一年後、二十九歳の夕霧は守れなかった。柏木が遺託した未亡人落葉宮とのスキャンダルである。母更衣の過度なまでの庇護のもと、文化的たしなみも申し分なく身につけて過ごしているこの内親王に、夕霧は、子育てと家事にまみれてすっかり家刀自になってしまっている雲居雁とは異なる、女性の理想を見いだし求め、小野の山荘で実事もないまま、宮と一夜を過ごしたが、その処置の行き違いで母更衣は逝去してしまう。その四十九日後、世間体の取り繕いと、落葉宮の心情無視の強引な所業による混乱の中、夕霧は、宮を一条の本邸に連れ戻して居座るが、宮には近づけないまま、夕霧は、六条院にやってくる。まず養母である花散里との挨拶の後、光源氏のもとに顔を出した。その時の、光源氏の想い。

御前に参り給へれば、かのことはきこしめしたれど、なにかは聞き顔にも、とおぼ　いて、たゞうちまもり給へるに、いとめでたくきよらに、このころこそねびまさり給へる御さかりなめれ、さるさまのすきごとをし給ふとも、人のもどくべきさまもし給はず、鬼神も罪許しつべく、あざやかにものきよげに若う盛りに匂ひを散らし給へり、もの思ひ知らぬ若人のほどに、はたおはせず、かたほなるところなうねびとゝのほり給へる、ことわりぞかし、女にて、などかめでざらむ、鏡を見ても、などかおごらざらむ、とわが御子ながらもおぼす。

（夕霧一三六二）

ここの光源氏は、噂を知りつつも夕霧をいさめられない。知らん顔をする。男盛りの美しい息子に、「さるさまのすきごと」も当然だと許されてしまう。息子本人もそうした自分の姿に、驕るのも当たり前だろう、と思う。十一年前の、息子に対する「おごり」による「すきごと」のいさめは、ここでは、そうなるのも「ことわりぞかし」と消極的ながら当然視されている。

光源氏がこう思うには、前段階があった。八月二十日頃に母

更衣が薨去し、夕霧が九月十日過ぎに二度目の小野山荘見舞いをしたころ、ごたごたの噂は光源氏の耳にも届き、紫上を前にして、こう言う。今回傷つくことになる、雲居雁と落葉宮とが、

いとほしう、いづかたにも心苦しき事のあるべきこと、さし離れたる仲らひにてだにあらで、大臣などもいかに思ひ給はむ、さばかりの事たどらぬにはあらじ、宿世と言ふ物のがれわびぬる事なり、ともかくも口入るべきことならず、とおぼす。女のためのみにこそいづかたにもいとほしけれ、とあいなく聞こしめし嘆く。（夕霧一三五一）

二人の女性は、亡くなった柏木の妹と妻、近い関係なので間にいる致仕の大臣の困惑など、わかるだろうに、こうなる運命というのは逃れにくいものだ、あれこれ自分が口をはさむ筋合いでない、と思いつつ、自身も息子の所業を嘆いている。こうなった仕儀に口入れすべきでないと思う理由は少しわかりにくいが、これに続いて、その後、光源氏のもとを訪れた夕霧の料簡が知りたくて、落葉宮母子を話題にする。夕霧は落葉宮のことには乗ってこず、そっけなかったので、「かばかりのすくよけ心に思ひそめてんこと、いさめむにかなはじ。用ゐざらむものから、われさかしにこといでむもあいなし」（夕霧一三五三）と考えて、その件は打ち切った、とあって、息子夕霧の大人の思慮と性格を考慮しての醜聞不介入を決め込んだ。こうした光源氏の夕霧判断に加えて、先ほどの母更衣四十九日後の、落葉宮を一条宮連れ帰り後の、夕霧との対面時には息子の男盛りの美しさに、女の件で驕っても当然とみたのである。とにかく、十一年前に較べて、光源氏がこのようになったのには、二つ理由が考えられる。一つは四十歳に至り、女三宮を六条院に迎え知ることになった、宮の幼さと仕える侍女たちの落ち着きのなさを、おそらく宮の側の高貴さもあって、男として否定し切る青臭い無分別も、その気力も、老域に入った光源氏にはなくなり、これまでの自己の人生経験の蓄積の許、人はさまざまと分別するようになったことである。女三宮が六条院入りして、四日目を紫上と過ごした光源氏は、五日目の昼、女三宮方に渡って言葉をかけると、

たゞ聞こえ給ふまゝに、なよ〳〵となびき給ひて、御いらへなどをも、おぼえ給ひけることは、いはけなくうちのたまひいでて、え見放たず見え給ふ。昔の心ならましかば、うたて心劣りせましを、今は、世の中を、みなさま〴〵に思ひなだらめて、とあるもかゝるも、きは離るることはかたき物なりけり、とり〴〵にこそ多うはありけれ、よその思ひはいとあらまほしき程なりかし、とおぼすに、（若菜上一〇六六）

と、光源氏の「丸くなった」姿が語られ、また、翌年三月、柏

木が女三宮を垣間見ることになる六条院の蹴鞠の日に先立って、女三宮方の侍女たちの様子が、若く花やかで物思い無げな風であると語られ、

たゞ明け暮れは、いはけたる遊びたはぶれに心入れたる童べのありさまなど、院はいと目につかず見給ふ事どもあれど、ひとつさまに世の中をおぼしの給はぬ御本性なれば、かゝるかたをもまかせて、さこそはあらまほしからめ、と御覧じ許しつゝ、いましめ調へさせ給はず。

（若菜上一一〇九）

と、多様性を認めるのが光源氏の性格だと語られる。いつから「御本性」になったのかはおいておくが、老境に入って来たこの時期、自分の理想や規範と合致しない人の姿をも受け入れ、寛容になっていることが知られる。

これは、藤裏葉巻三十九歳の夕霧らへの訓誡の姿勢からすると、年月もさほど経過しておらず、不審が残るが、この変化に関わるかと思われる光源氏の思いが、女三宮の六条院入り三日目の条に見える。

三日が程は、夜がれなく渡り給ふを、年ごろさもならひ給はぬ心地に、忍ぶれどなほものあはれなり。御衣どもなど、いよ〳〵たきしめさせ給ふものから、うちながめてものし給ふけしき、いみじくらうたげにをかし。などて、よろづの事ありとも、また人をば並べて見るべきぞ。あだ〴〵しく心弱くなりおきにける我が怠りに、かゝる事もいで来るぞかし。若けれど中納言をばえおぼしかけずなりぬめりしを、とわれながらつらくおぼし続くるに、

（若菜上一〇五九）

女三宮の六条院入りを、押しつぶされそうな思いに耐えて光源氏の世話をする紫上を見て、紫上をこのようにしたのも、不実で堅固な節操もない自分の過失が原因だと思量し、女三宮の父朱雀院が、婿候補から実直な息子夕霧を除外したのに較べて、自分は弱点をつかまれていたのだと、自分自身を情けなく思っているのである。つまり、光源氏自身が一年前に、息子に対して垂れた訓戒を、破ってしまったのである。ロイヤル・タイラー氏は、権力・名声の獲得に積極的な光源氏が、藤裏葉巻で准太上天皇となり、それにふさわしい妻として女三宮を迎え入れ、紫上はそれを受け入れなければならないし、どんな若い男も、光源氏の妻となった女三宮に近づくことはできけない、と、判断したところに、光源氏の内なる「おごり」を見られた。[6] その箇所の物語本文に、「おごり」「おごる」という語は、光源氏に関して用いられてはいないが、妥当な見解だろう。かつて二十歳の得意絶頂期にあった光源氏が、春二月、南殿の桜の宴の夜、弘徽殿の細殿で、右大臣方の姫朧月夜と遭遇し、男に抱きしめ

られて女が、「わななく〳〵、『こゝに、人』とのたまへど、『まろは、みな人に許されたれば、召し寄せたりとも、なむでふ事かあらん。たゞ忍びてこそ』との給ふ」（花宴二七一）箇所に、「おごる」等のことばが見られないのと同様である。考えれば、藤裏葉巻で一族の将来を見通し、おごりの訓誡をして、自身はあれほど明確に、「御心落ちゐはて給ひて、今は本意も遂げなん、とおぼしなる」と、出家を実行しようとしていたのに、その後、間を置かず准太上天皇に即いたこと自体が、その時の光源氏における驕りの表れであるだろう。

ちなみに、須磨退居以前の光源氏が、父院の寵愛と威光、光源氏自身の資質の超絶性により、驕りとともにあったことは、この花宴巻の朧月夜遭遇時の箇所をはじめとして明らかであろうが、いくつか例示しておく。

（光源氏からの手紙を、軒端荻の夫の）少将も見つけて、われなりけりと思ひあはせば、さりとも罪許してん、と思ふ御心おごりぞあいなかりける。（夕顔一四二）

（野宮に六条御息所を訪問して）心にまかせて見たてまつりつべく、人も慕ひざまにおぼしたりつる年月は、のどかなりつる御心おごりに、さしもおぼされざりき。（賢木三三六）

わが御心地にもいたうおぼしおごりて、「文王の子武王の弟」とうち誦じ給へる、御名のりさへぞげにめでたき。（賢木三七四）

須磨明石から帰京して以後の三十代の光源氏には表立って、「おごり」「おごる」等の語は用いられていないが、三十九歳の梅枝・藤裏葉両巻で、主要な一族に驕りの誡めをしたということは、それまでの人生の体験に基づいて、驕りを意識し続けていたということであり、准太上天皇となり、四十歳の春、女三宮の六条院入りを引き受けた根底にも引き続き、光源氏の心には「おごり」が存在していたと、みなされるのである。

落葉宮事件で息子夕霧の「おごり」による「すきごと」に、光源氏が寛容になっているもう一つの理由は、この、自分の理想や規範と合致しない人の姿をも受け入れ、寛容になったことと腑分けしがたく絡まり合っている、人への恋慕の情自体を、否定できずにいることである。今見たように、周囲の人の有さまに寛容になったきっかけは、息子夕霧には驕りによるすきわざの訓誡をしていながら自身は、藤壺宮の姪、朱雀院寵愛の内親王、准太上天皇相応の配偶の魅力にひれ伏す過ち、「あだ〳〵しく心弱くなりおきにける我が怠り」を犯してしまっていたからである。息子にはすきによる女性問題の将来の過失を誡めながら、自身はそれを守れず、紫上を追い詰めた。このことによって、光源氏は、女性恋慕の情の克服の困難さとその抜き差し

ならない力、自身の性情の弱さを知り、人のすきわざを非難できなくなったのである。であるから、女三宮宛の柏木の手紙をみて、二人の裏切りを知った時も、

故院の上も、かく御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせ給ひけむ、思へば、その世のことこそは、いと恐ろしくあるまじきあやまちなりけれ、と近き例をおぼすにぞ、恋の山路はえもどくまじき御心まじりける。

（若菜下一一九九）

と、藤壺体験の反省と、それとの類比想起の意味には大きいものがあるが、柏木の恋心を非難しきれなかったし、夕霧の落葉宮執心も、わが身を顧みれば否定できなかったのである。

五　驕りの因となる女性

こうして、四十歳を前にした、光源氏による一族への驕りの誡めは、驕りを反省し、驕りから守られた、明石姫や紫上らの女性たちに対して[7]、光源氏や夕霧の男性たちは、主に女性問題において驕りから自由になれず、意識・無意識的に過ちを犯した。これは、女三宮事件の当事者柏木においても例外ではない。六条院での蹴鞠の日に、女三宮を垣間見て、「胸のみふたがり」、妻の落葉宮邸でなく、「思ふ心ありて」（「源氏出家後、女三の宮を自分の妻にしたいという心」角川文庫注）独り住みしている実家の部屋に戻り、

我が身かばかりにてなどか思ふことかなはざらむ、とのみ心おごりをするに、このゆふべより屈しいたく、物思はしくて、いかならむをりに、またさばかりにてもほのかなる御ありさまをだに見む、

（若菜上一一一八）

と、気の散らしようもなく、女三宮の乳母子小侍従あてに手紙を送り、女三宮を垣間見たことを仄めかし、それ以後、具体的に女三宮接近を心がけるに至る。柏木は「心おごり」がもとで、女の問題を起こし、破滅した。このように、光源氏、夕霧、柏木と、男たちが驕りのため、女性問題で失態を犯したのは、おそらく藤壺、六条御息所、朧月夜、女三宮、落葉宮、と高貴な付加価値の高い女性たちが、個々の女性への男の愛を認めたとしても、男を飾りたて、自尊の心を満たす価値をも、一方で持っていたからである。

一族に驕りを誡めた、光源氏自身の驕りは、女三宮の六条院受け入れ以後、いつまで認められるのであろうか。あだあだしい心弱さのために、紫上を追い詰め苦しませて以後、密通の当事者である女三宮・柏木たちに一時的な怒りはもつが、彼等の出家後・死後、光源氏は彼らを受け入れていくし、コキュとな

って抱いたその怒り自体は、自尊・自愛の回復行為ではあっても、驕りではないだろう。老域に入ってもその存在の推定される驕りにより、光源氏は、女三宮を六条院に受け入れ、紫上を苦しめるに至らせたことで、理性どおりに動けない人間のありよう、弱さを認め、柏木や夕霧の行為の中に、かつての自身の姿を見て、制御しがたい驕りの威力の普遍性・衝撃性を受け入れ、馴染んでいくことで、光源氏はようやく驕りへの「免疫」を自身の中に造って行ったのではないか。ならばそれは、老いの衰えではなく、驕りとともにあった光源氏の人格の成熟というべきだろう。

注

（1）三谷栄一氏『物語史の研究』八四頁。

（2）詳細は「藤裏葉巻『残り給はむ末の世などのたとしへなき衰へなどをさへ思ひはばからるれば』攷」『文学部論集』（佛教大学）93、二〇〇九年三月、参照。

（3）ホコルの例だが、老子第二十四章にも、「自伐者無功、自矜者不長」とある。

（4）ここに挙げた、驕りを誡める和漢の文献については、佐伯真一氏「『平家物語』の『おごり』」『国語と国文学』二〇〇七年二月、にも既に言及がある。

（5）石阪晶子氏「『おごり』と知る―紫の上、三十二歳の孤独―」『日本文学』二〇〇七年九月。

（6）ロイヤル・タイラー氏「おごれる光源氏」『源氏物語千年紀記念　源氏物語国際フォーラム集成』二〇〇九年、源氏物語千年紀委員会。

（7）女性の驕りが、その結婚生活・人生に悪影響を及ぼす例は、葵上に見える。冒頭にあげた藤裏葉一〇〇八頁例の他、次例がある。

同じ大臣と聞こゆるなかにも、おぼえやむ事なくおはするが、宮腹に一人いつきかしづき給ふ御心おごり、いとこよなくて、すこしも愚かなるをば、めざましと思ひきこえ給へるを、男君は、などかいとさしも、とならはい給ふ、御心の隔てどもなるべし。

（紅葉賀二四五）

――源氏物語本文の引用は、源氏物語大成校異篇により、一部校訂し、仮名遣をただし、漢字をあてるなど表記を変えてある。漢数字は頁数。――